

Title	『近世史研究案内』
Sub Title	
Author	田中, 萃一郎
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.4, No.5 (1910. 11) ,p.593(93)- 603(103)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19101100-0093">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19101100-0093</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

左れば吾人は國家を地上の上帝として崇仰せざる可からず、然り而して自然を會得すること容易ならずとせば、國民を了解するは更に無限に困難なりと知る可し（法律哲學第二七二節）精神は唯自覺せるものに於てのみ眞實なり、國民的精神たる國家は其諸般の關係、倫理上の原則、並に個人の意識を普及する所の法律なり、従つて一民族の憲法は主として其の民族の自覺の性質範圍の如何によりて定まるものと云ふ可し（第二七四節）

拿破崙は獨斷的憲法を西班牙に布かんとして失敗せり、憲法は單なる手工品にあらずして、幾世紀の培養を要件とする産物なり。

拿破崙が西班牙に與へたる憲法は西人が從來維持し來れるものに比して遙に合理的なりしなり然も彼等は之を全然彼等に不適當なるものとして之を拒めり、凡そ憲法は人民の權利思想の表明にして其の文化の模寫たる可きものなり、然らずんば其の憲法は無意味且つ非眞理なり（第

二七四節追加）

國家の目的とする所公民の安寧福祉を計るにありとは眞理なり、若夫れ國家にして人民の所期に副ふ能はず其の希望を滿す能はずとせば、斯かる國家は極めて不安なる基礎の上に立てりと云はざる可からず（第二六五節追加）

國家公共の事項に關し個人の判斷意見及び助言の提供を意味する所の主觀的自由は、輿論の形體に於て表明せらる、輿論は絶對實質眞正の要素を包含すると共に、多數者の獨立せる部分的特異の意見を混有せるものなり（第三十六節）左れば輿論は絶對に眞理にあらざると共に絶對に誤れりと云ふ可からず、然り而して此輿論の眞偽を判斷し玉石を辨別するは是れ偉人の事なり、時勢と輿論が何を意味し何を要求するかを看取して以て之を時代に告ぐるもの即ち是れ時代の偉人なり（第三十八節追加）

『近世史研究案内』

田中萃 一郎

風光の明媚なるに於て、ハイデルベルヒと覇を南獨に争へるフライブルヒ大學は、進化學者ワイズマンを始として、種々の方面に於ける知名の碩學を網羅せり。史學に於てもペーロウ、マイネツケ等は實に獨逸史界の重鎮たり。而して這般の大家と共に史學の講座を擔任して近世史を講じつゝある、ゲーウオルフ講師（六十五年六月十二日生）は今回『近世史研究案内』(Gustav Wolf: Einführung in das Studium der neueren Geschichte. Berlin 1910. M. 16)の一書を公にして、歐洲、近世史研究者に至便なる参考書を提供せり。歐洲近世史の知識は苟くも教育ある人士に取りて必要缺く可からざるものにして、我邦にありても此種の研究に志さんとするの讀書子は決して尠しとなさずこれ余が敢て本欄に於て稍々詳細にウオルフ講師の新著を紹介せんとする所以なり。

自序に據るに本書の目的は、第一特別の問題と關係なき、一般的に重要なる問題に注意を向け、第二史學の學生並に研究者の爲に近代の史料並に參考書を説きて獨立研究の第一歩を容易ならしめ第三範圍を限りて一の參考書を作らんとするにありと云ふ。蓋し、近世史研究の序論として必要なる萬般の問題を説明せんことは到底一卷の書冊の能くす可き處にあらざれば、著者は即ち範圍を限りたるならん。かくて、先づ第一に論述を避けたるは歴史哲學上の問題にして、著者は之をベルンハイム並にラングロア、セニョーボの著書に之を譲れり。又詳細なる史籍目錄も勿論必要なれど、既にダールマン、ワイツ獨逸史籍目錄第七版モノ一佛國史籍目錄新版等に照すも、これ一人の力の能くし得可き處にあらざればとて、之が記述を避けたり。而して著者は又専ら政治史の方面にのみその力を注げるが、而も本文は菊版にて七百四十五頁に上り、ベルンハイムの第五六版の七百九十八頁なるに比して、五十餘頁の差あるのみ。その

内容の豊富なる以て知る可きなり。

序論は僅に二十一頁に過ぎずして第一節に近世史研究發展の次第を述べ、第二節に近世史料批判の任務範圍を説きて古代史中古史家の任務と近世史家の任務との相違を明にし、第三節に於て史料を傳説と遺物とに分ちたり。この第三節に於て著者は政治史の近世史家に主たる勞作の對象たる可きを論じて、曰く、史料の乏しく、社會全般の事情漠然たる時代に就ては政治上社會上思想上公私凡ての方面に亘りて之を研究し得可しと雖も、現代に近づき史料益多きを加ふるに至りては、人類活動の全般に亘りて獨立的研究を試み、之を敘述せんとすること不可能なり。假りに第十九世紀に就てかゝる歴史を著さんとし、精神科學自然科學の進歩を悉く了解せんと努力すと思へ、果して能く、その目的を達し得可きや。歴史家たるもの、單に他人の所論を踏襲して以て足れりとせば、即ち止む、然らずんば勢ひ、その研究の範圍を制限せざるを得ず、而してその政治史の取る可き

ものあるは實に二箇の理由によれり。第一、國家と政治的活動とは人民を結合せしめ得可き最も重要な連鎖なり。概して一國家の歴史若くは國家間の交渉の歴史を論ずる時は自から文物の焦點と相接觸し、比較的廣汎なる觀察を試むることを得可し。第二政治史以外の史的を行はんとせば豫め之に必要な専門的學識を具へざる可からず寧ろ之を専門家の研究に委ぬるこそ策の得たるものなれ。例へば建築化學、醫學の歴史は史家に取らるべき特殊の學修を経るにあらずんば以て企て難し、然るに自然科學者若くは醫學者に取りては専門科學の徐々に發展せる經過を知ると極めて、必要にして、勢ひ之に精通せざるを得ず。國家の發展存在の要件に就ては、その事情全く之と異り、これ實に史家の必ず、研究せざる可からざる問題なり。哲學者、法律學者、自然科學者等も時に或は政治上の問題に接觸することあるも、敢て之を主たる研究題目となすが如きことなきに國家は古來人類社會上の設備中において、最も有力なる

位地を占むるが故に、歴史研究者は何れの時代を問はず、その政治上の事情を稽査して之を會得する時は過去の真相の大半を了解したるものなりと云ふ可し」と、政治史の研究の重んず可きに就ては余も又全く著者と同一の意見を抱くものなり。

第一編は傳説に就て説明し、五章に分て詳述せり、近代史家が文書の稽査にのみ拘泥して、傳説を輕視するの傾向を有することは自序にも一言せるが如くにて、交通、印刷、書店、文庫等の技術的進歩と、文筆上の作品の發展との間に密接の關係存するより、概説に次で、第一章は近代修史發展の技術的前提として郵便制度、印書術、書籍賣買、圖書館制度に就て、百頁以上を費して之を記述せり。各項何れも参考書目、沿革の二節に之を分てるが、書籍業に關する参考書目の一節は更に甲乙丙三部に分ち甲に於ては書籍業の沿革を記述せる書籍に就て解題を試み、その第十九世紀に關係せるもの、うちには百科全書の出版を以て有名なるライプチヒ市のブロックハウス書店の創

立者フリードリヒ・アーノルド・ブロックハウスの傳記並に年鑑地圖等の出版を以て世に知らるゝゴータ市のペルテス書店の創立者フリードリヒ・ペルテスの傳記等を挙げたり。乙に於ては目錄之學即ち書史に就て記述し、目錄之學の科學上諸般の目的に稱ふものなることに説明を起し、種々の書目に就て解題を施せり。即ち獨逸の書目より佛英伊等の諸國に及びし、更に書史目錄に及び、學會出版目錄、大學出版目錄等をも説明せり。而して丙に於ては書籍業者の機關雜誌に就て記述せり。次に書籍業の沿革に於てはフランクフルト、ライプチヒの市に關する記事をはじめとして以て現在に於ける市場取引の狀態に及ぼせり。

扱史上の傳説は主として修史家の作によりて傳へらるゝの常なれば第二章は「史料としての修史家」を論じたり。史學史に關してはベーロウ、マインツケの叢書に Prof. Blich: Geschichte der deutschen Geschichtsschreibung in Mittelalter 尙し Prof. Fester: Geschichte der neueren Historiographie の

豫告あり又マイスターの叢書にも豫告あれば極めて省略に従ふ可しとあれど中古史家と近世史家との區別、一七〇〇年以前の近世史、英國實驗哲學と修史の勃興佛國の新傾向並にその影響、ヘルデルの修史に及ぼせる影響ランケ以來の獨逸の修史等の數節に分ち七十頁の論述を試みたり。而して史學史參考書目の記事も數節に分たれ、冒頭に掲げたる修史學者の一節に於てはウエゲエレ、ベルンハイム、ラングロア、等をはじめとして佛國の史學雜誌第一號の開卷第一に掲げられたるモノの第十六世紀以來佛國に於ける歴史研究の進歩と題する論文、並に英國の史學雜誌第一號の冒頭を飾れるアクトン卿の獨逸史學派と題する論文等をも略評し、次に文學史文明史に關する史籍科學史に關する史籍、傳記に關する資料、史籍書目、等の各節に分て詳細に之が解題を掲げたり。今英文學史に關する記事を譯出してこの解題の如何に親切なるやを示さん。

『英文學史の簡明なる獨文參考書は Koltzings, Grundriss der englischen Literatur von ihren Anfängen bis zur Gegenwart. 3. Aufl. Münster 1899 』にしてこの書は又第四頁以下に價値ある「英文學史研究參考書目」を收め、各書の特徴をも示したり。Meyerの英文學史に收めたる參考書目は更に詳細なり英人の手に成れる英文學史の小なるもの、うちには殊にエヂンバラ大學文學教授セインツベリーの A Short History of English Literature 並にアンリ・フォーレーの A First Sketch of English Literature を舉ぐ可し。

『以上の略史よりも更に精密なるは倫敦の書肆マクミラン會社の計畫せる叢書にして、英文學史の各時期を取りて、各大家をして獨立に述作せしめれば、その表題は殊に相互の間に連絡を缺き、その内容も亦各作家の任意の判斷によりて執筆せしめたるも、而も互ひに相補ふて首尾一貫せる英文學史を爲す可し。ブルックの初期英國文學史はこの第一卷を爲せるが、これ余輩の研究の範圍外にあり。之に次ぐはセインツベリーのエリザベス

朝文學史なるがスチュアート朝の初期並にクロムウエル時代をも包括せるが故に、表題内容と相合はず。この書に於てセインツベリーは成る可く完全に且明瞭に、第十六世紀の中葉より第十七世紀の中葉までに互りて文學界を支配せる思潮を論述せんと努めたり。史學家に取りて殊に興味あるはペーコンの評論(二〇七頁以下)並に英國新聞雜誌の創始時代に關する記事(二二三頁以下)なりとす。注意す可きはセインツベリーがその論述せる時代の人物と雖も寧ろ後世の思潮に關係あるものは之を除き、而して後世の人物と雖もその性格能く一五五〇年乃至一六五〇年の精神を代表せるものは之を收めたることこれなり。歴史家に取れてこの卷よりも更に重要なるはゴッスの手に成れる佳著第十八世紀文學史にして、一六六〇年以後一七八〇年までの時代を敘せり。これ即ち英國の新聞雜誌業英國の國民經濟學は勿論、ヒューム、ロバートソン、キツボンの出るありて英國の史學も亦その指導者を得たる時代なり。ゴッスはすべて這般の問題をも攻究し、文學上の現象にのみを

の注意を限らず、その専門に於て卓越せる人物の履歷事業をも詳細に商量し、最後にその論述せる全時代の特徴に關して概括的評論を加へたり。詳細を極めたる參考書目も亦頗る有益なり。セインツベリーの第十九世紀文學史はゴッスの書と異りて、匆卒の間に大體の知識を得んとするものに取りて、物色に便なり。ゴッスはその史料を排列するに方り發展の内的動機を標準とせるが故に、敢て一個人を閉却することなきも、事實の性質如何に従ひ、之を隨處に論述せり、故にゴッスにありては一定の人物に對するその論評如何を知らんとするに方りては各處を参照せざる可からず。之に反してセインツベリーは個々の作家を彙類するに主として外的方面に重きを置き、且極めて大體の區分を立てたるのみ、例へば歴史研究家を舉げて悉く一章に之を收めたり。隨てセインツベリーを以てゴッスに比する時は思潮の論究未だ透徹せざるものあるが如し。

『マクミラン書店の計畫よりも更に大規模なるは

ヘンリーモーレーの選述せる English Writers なり。不幸にして著者の病に仆れしが、爲近世史家に取りて興味ある時代の論究に著手せず、最後の第十一卷は漸くにしてシェイクスピアに及べりされど近世紀の門戸に臨んで未完となれるこの書は吾人に取りて價值なきにあらず。第一卷は冒頭に英文學史の全體を通じて有益なる概論を試み、就中英國と爾餘西歐文明國民との間に於ける相互の影響に就て詳述せり。モーレーは實に英獨の關係は殊に十八世紀に於て顯著なるものありとなせり。以後の諸卷に於ても、モーレーは決して英文學の發展を以て、孤立せる島嶼内の現象なりと認めず、第四卷に於てはウィクリフ出現を以てインノーケント三世以來の教會改革運動と密接の關係あるものなりとし、第六卷に於て英國印刷術の起源を説くや、獨逸和蘭に出でたる先輩の事業を等閑に附することなかりき。文藝復興の英國に及ぼせる影響を論せる第七卷に於て亦伊太利に出でたる文藝の保護者並に大家の論評を怠らざりき。

第八卷乃至第十一卷は殊に近世紀に關するものなるがジオン、ノックス、ペーコン、英國の政論家出版物檢閲等に對するモーレーの論述は殊に史學家に取りて參考の價あり。  
『ジオンモーレーの董刊せる叢書英國文豪傳は、學問上文學上あらゆる方面に於て卓越せる人物を取りて評論を加へ、一人毎に小冊子を爲せり。而して傳記起草者は何れもその好む所に從て記事の取捨選擇を試みたるが故に、傳記の脚註多くして科學價值を有せるが上に、一般讀書人の消閑の具に供せらるゝ可し。  
『ガーンネット、ゴッスの共著に係る大作 English Literature, an Illustrated Record 四卷は挿畫極めて多く一般購客を目的とせるものなり、但しこの書は第四卷の終に詳細なる索引を附せるも而も參考書としてよりは寧ろ讀本として目す可きものなるが故、Englischen Studien 第二十四卷(萊府一九〇四年)二百七十三頁以下に載せたるケツペルの詳評によりて之を知る可し。

『チエンバースの Cyclopaedia of English Literature』はパトリックの校訂せる新版あり、重要な參考書たり。項目の多くは傳記に關係せるものなるが、各項何れも専門家の筆に成りその記事は勿論附載せる參考書目も亦有益なり。第一卷は一六八八年迄の事項を收め、第二卷は第十八世紀の終に及べり。記事に依りては文豪の作例をも示したるが、例へばロバートソンのカール第五世史より米國發見の條ルツターの條を擧げたるが如し。北米並に英國植民地に關する事實をも又登載しあり。  
『ヒツポリト、テインの英文學史』もこゝに擧ぐ可きものなるが、その注意を要するは英文學の參考書たるの點にあらずして、寧ろ、テインの思想發展の上に於ける位地並に佛國の史學に及ぼせる影響の輕視す可からざるの點に在り。蓋しテインは英國に漫遊して、その知識を求むるに單に書物の上に於いてせず活社會の觀察に重きを置きしも而も英文學史は餘りに主觀的にして以て英文學の研究の指針となし難きものあり。實に英文學史は現

代の佛國淵源に次でテインの傑作たり。殊に傑出せるは史學の現在と將來とを論評せる有名なる序論之なり。これ故國に於てテインの辯難攻撃の焦點となりし所以にしてテインはこの序論に於て殊に歴史哲學に關する意見を發表したり。即ちテインはすべての歴史上の事變を一定の規律の下に起れるものとし、文學をも歴史をも心理上の原因によりて説明し得可しとなせり。而してすべての事變の主因を爲せるものは人の之に屬する人種と、人の之に於て活動する境遇と此の熟字は専門語としてテインの創めて用ゐたる所なり。並に人の計畫を立て、之を實行する瞬間と即ちこれなり。この三種の假設を根據としてテインは多年佛國の文學史學を支配したる種々の傾向に攻撃を加へ、殊に、ロマンチックの解釋を非難し、歴史上の事變を以て自然の現象と同じく、規則的作用を有する勢力によりて左右さるゝものなりと説けり。  
『英文學史の有益なる參考書はエーアリアポーンの大著『英文學英米作家批評字典』にしてカークの

續編二冊は一八九一年にフイラデルフィアに於て出版せられたり。この書は普通の著作家字典の比儔にあらざれば、茲に掲げたる次第にして、その序文は既に價值を有せり。即ち序文の例として字書の目的用意等を説けるが上、同種類の著作に對して略評を加へ、著名の引用書目を掲げたり。次に入門の彙として英文學の略史を掲げ有益なる圖表をも添えたり。字書は作家の價值如何と參考資料の多寡とによりて記事に詳密ありと雖も、各作家の經歷著作を擧げたるのみか、之に對する短評をも録せり。第三卷には索引あり、字書に收めたる作家をその種類に從て分類せり。續篇も同一の原則に基きて編纂されたと文學上の作品の夥しく増加せるが爲、大に記事を省略せるが如し。英文學に從事せる外國人も亦漏さず。』

マクミラン書店の英文學史叢書を紹介しつゝ、シヨフイールドの『ノルマンの征服以後チヨーサーまでの英文學』を擧げず、又米國出版の著作に就て殆んど述る所なきが爲、余輩はこの記事を以て

敢て完全なりとは云はず、又ケムブリッジの英文學史を全く閉却せるが如き、この記事の必ずしもアツプ、ツ、デイトなりと認め難き點なるも、而も初めて英文學に志さんとするものに取りては、この記事に於て充分なり況んや近世史を研究せんとするものに於ておや。

第三章（本書には史料としての修史家の章をも第三章とせるも、これは概説に第一章と題せるが爲かく重複を來せるものと信じ、上文に於ては本書と異り右を第二章と改め且本書の第二章を第一章と改めたり）は新聞雜誌を論せるが先づザロモンビユーヒヤイ等をはじめ新聞史の參考書を解題し次に新聞雜誌の特徴は定期なることと公刊すること内容の多方面なること、實際的なることの四點にありと説き、新聞雜誌の前身、獨逸に於ける新聞の起源佛英兩國新聞の起源、三十年役後の獨逸の新聞等の五項に分て新聞業の沿革を説き、歴史研究者の參照す可き専門定期刊行物の一項を添え最後に史料としての新聞雜誌を論じたり。

ゴータの高貴系譜年鑑、伯爵家譜年鑑各國の史學雜誌（但し米國史學雜誌に就ては説明なし）英のアーセニアム等の新刊評論、各大學の史學研究叢書等は悉く歴史研究者の參照す可き専門定期刊行物の中に解説しあり。史料としての新聞雜誌の項は初に公刊資料に基ける編纂物を論評せるが、日刊倫敦タイムスの如く毎月索引を發行するものは兎に角、普通の目録、さへなき日刊新聞紙を資料として、研究せんとせば、實に望洋の嘆ある可くこれ英國に Annual Register 佛國に Annuaire historique 獨逸に歐洲歴史年鑑の刊行せらるゝ所以にして公刊公文書集とも目す可き Staatsarchiv も亦之と共に併敍されたり。而して科學的新聞雜誌批判の任務の項は、現代史の研究に從事するもの、必讀す可き所たり。

新聞雜誌に次では第四章に於て備忘録追懷錄に就て説明せり。傳記並に書簡集の盛んに出版せらるゝ英國に於ても、史談會速記録經歷談等の重要視さるゝ我國に於ても、備忘録の科學的價值に何

等の相違あるにあらず、これ實に傳説の一種たるに止まるものたり。而もその如何に獨佛諸國に於ても亦この種の出版夥多しきやは本書に就て知る可し。第五章の百科全書、専門辭書、全書、讀本、叢書に關する評論は傳説の説明を終れり。百科全書専門辭書に關する部分は今之を略し、直ちに初學者用の讀本として擧げたるものを數ふればウエーバーの世界史ラヴィス、ラムバウの全史ゲバールトの獨逸史、ブルンナトの獨逸法制史、コンラード、フイリツポヴィツチの經濟學にして、更に進んで之を究めんとするものに對してはペーロウマイネツケの中古近世史叢書、イヴン、ミュラーの上古史學叢書ブランデンブルヒの史學文庫、マイスターの史學摘要等を始めとして神學法律學經濟學言語學、等に關して典據となる可き書物を紹介せり。最後に爾餘の史籍叢書に就て敘述せるが例へばシュレンターの第十九世紀獨逸發展叢書に於ては殊にチーグラーの思潮史、マイヤーの文學史、カウフマンの政治史、を擧げ『チーグラー

の書は全叢書の序論として見る可く、その表題によりて想像し得るところよりも内容遙かに豊富なり。蓋し、敢て思潮史のみに限れるにあらず、政治社會に於て表現して之を指導せる思想觀念を捉らへ、思潮史と政治史との關係を描寫し出せり。マイヤーの書は燦爛たる才筆を以て、廣義の詩人は勿論科學的作家をも論評せり。歴史の克復の章に於てはランケより政治史家を經て文明史家フライタハ、リール並に小誤家コンラード、フェルデナンド、マイヤースに至る發展の徑路を指摘せり。到る處に著者はその獨創の意見を述べ、豊富なる材料を能く咀嚼せり。カウフマンがマイヤーの如く汗牛充棟の資料を簡明に摘録し得たるは、蓋し、個人的見解を之に關連して告白し敢て完全なる敘述を期せざりしが爲なり。而もこれ本書に特別の意義を與ふる所以なり。トライチケと同じく、カウフマンは先づ第一に獨逸の政治上の發展の上に於ける民族的要素に重きを置きしが、自由主義者に對してはトライチケよりも遙に多大の同情を注

けり、蓋しトライチケはその晩年に及びては全く自由主義者と相背馳するに至れり」と評せり。その他ラヴィス、ラムバウの全史ケムブリッヂ近世史等英佛の選述に就ても簡單の紹介あり。

第二編遺物の説明に於ては廣義の意味に於てせずして専ら文書、並に狹義の書類に就てのみ敘述せり。玆に文書とは詔勅。判決法令、條約、辭令、寄進狀、遺言狀、領收證等にして、狹義の書類とは信書、議事録、意見書、法律草案等を指せり、これ即ち根本史料にして、史家研究の領域は専らこの方面に存せりと云ふも、不可なし。故に本編は之を二章に分ち第一章に於ては文書並に狹義の書類の種類に就て詳細なる説明を加へ、例へば國際條約に就てはその公刊の方法、條約並に國際法の參考書、條約の性質、史學上より條約を觀察す可き見地、等に分ちて之を論評し、法令に關しては舊獨逸帝國の法律、獨逸各國の法律並に參考書史料としての法律、一八〇〇年以前各國の立法、新立法等の諸項に分て之を敘述せり。第二章は、

新 著 紹 介

Les Origines diplomatiques de la

Guerre de 1870—1871,

(Recueil de documents Publié Par le Ministère des Affaires Etrangères. Tome Premier, 25 de cembre 1863—21 février 1864). Paris, 1910

佛國政府は一八七〇—七一年の佛普戰爭の由來を明にするため外務省祕藏の外交文書を發表するに決し、去る一九〇七年の三月外務省内に此等文書の調査編纂掛を設け、記録課長全權公使ドルンモントを委員長に、オーラール及ブルジョア二教授並に代議士ライナックを委員とし、熱心に取調中なりしが、滿三年餘を経て漸く其第一卷を出版するに至りたるもの即ち本書なり。されば本書が外交史研究上の無上の珍寶たるは敢て多言する迄もなし。予の如きも今迄當時の外交を研究するに當り、佛國外交文書の公けにせられたる者乏しき

文書の來歴と題し先づ草案、原本、謄本、等の別を説き、次に記録制度に就て、詳説せり。各國記録局即ち文書館の現状記録研究者の心得、記録出版の機關等は即ち本書の結末を爲せり。思ふに本書によりて益を得るは獨り史學家のみ止まらざる可し。